

やまなしにおける名所景観の特性

山梨大学大学院医学工学総合研究部 正会員 北村眞一

1. はじめにー山梨県における名所集の編纂

やまなしにおける名所の記述は比較的新しく、「甲斐叢記」全10巻が一名「甲斐名所図会」とも呼ばれ、体系化された名所図会である。これは全10巻で著者の大森善庵、快庵が続けて没し、没後の嘉永4年(1851)に前半の5巻を刊行し、後半の5巻が明治26年(1893)に大森保三により出版された。参考にした文献は最も権威あるものとされる「甲斐国志」文化11年(1814)が地誌として、また名所誌は萩原元克(1749-1805)の「甲斐名勝志」全5巻であるが、「甲斐叢記」は挿し絵を入れて初めて体裁が図会となった。近年の名所の網羅的紹介には、山梨県編のふるさと自慢シリーズ、「ふるさとの名所」(1984)、「ふるさとの自然」(1985)がある。また山梨県からは山梨百名山、山梨の紅葉百景と題するパンフレットも発行されている。

山梨県におけるより厳選された名所の編纂は、甲斐八景(享保年中)、木版画集「甲山峽水」の十八景(明治39年(1906))、甲斐車窓十景十名所(昭和6年(1931))、塩山八景十名所(平成元年(1989))、山梨市八景(平成元年(1989))、大月市富岳十二景(平成2年(1990))、富士川25選(防河法3選、人と水の戦いの場11選、敬水11選)(昭和)などがある。本研究では名所の選定の経緯とその特徴を明らかにする。

2. 名所選定と八景式

名所の選定に至るには、(1)様式化された中国の瀟々八景の写しとして郷土に当てはめる、(2)権威ある文化人などが行楽地の格付けを行う、(3)民衆が好んで訪れる行楽の地を比較して指定するなどが原型としてある。山梨の名所八景はこれらのいずれも含んでおり、八景の写しは古典的で、むしろ厳選された地域の風景の格付けという意味が強いものと思われる。

甲斐八景は、甲府八景とも呼ばれ、享保年中に柳沢吉里が中院大納言通躬ら8人に甲府八景の和歌を乞い、中御門天皇の勅許を得たものである(山梨百科事典、1989)。夢山春曙(現在の愛宕山の奥の峯)、石和流螢(石和町笛吹川と支流)、竜華秋月(市川大門の竜華院の庭の池と月)、金峯暮雪(金峰山)、富士晴嵐(富士山)、酒折夜雨(甲府市酒折の宮)、恵林晩鐘(塩山市恵林寺)、白根夕照(南アルプス白根三山の北岳、中白根岳、間の岳)の八景である。これは中国の八景の写しであり、甲府盆地の様式にあてはまる景勝地をあてはめている。富士から夢山まで、崇高な山岳から、身近な里山まで幅が広い。和歌は全国への広告効果を狙い、天皇の権威で格付けをすることにより、行楽の名所として箔をつける意味があったものと思われる。

甲斐車窓十景十名所は、当時の国鉄が中央線新宿ー甲府間の電化を記念して山梨日日新聞社が選定し、昭和6年3月3日(1931)に発表した。新聞の読者の投票で20勝と次点の6勝を予選し、小島烏水、中村星湖、西条八十、平田紀一(県知事)、成島治平、名取忠愛、矢島栄助、細田武雄、堀内良平、野口二郎ほか17人の審査員の現地調査により決定した(山梨百科事典、1989)。さらに新聞社ではこれらの写真を募集し、「大菩薩峠」が一等になっている。甲府駅待合室で写真展を開催し、祝賀会では「甲府夜曲」(西条八十作詞、中山晋平作曲)「甲斐車窓行進曲」(市川青児作詞、中山晋平作曲、西条八十選)を発表した。

十景は、アユ漁の桂川、甲府盆地の大観とブドウ郷、万力林と差出の磯、南アルプスの遠望、駒・鳳凰の展望、長坂の富士、富士・八ヶ岳の遠望、日野春高原の展望(甲斐駒ヶ岳と南アルプスおよび八ヶ岳)、雄峰の八ヶ岳、富士川の急流である。十名所は、猿橋、城跡岩殿山、大菩薩峠と塩の山、酒折の宮と善光寺、甲府城跡、住吉の神苑、鎌田川の螢、高田浅間神社と宝寿院、霊峰身延山、南部城跡である。十景は中央線から見える風景であり、桂川沿いの谷間から甲府盆地へ出て、笛吹川を渡り、甲府駅を通過し、日野春方面

キーワード：名所、山梨、景観

連絡先(400-8511 甲府市武田 4-3-11 山梨大学大学院医学工学総合研究部・電 055-220-8691・FAX 同左)

へ釜無川に沿って上り坂となる展望で、スケールの大きい景観と言える。それに対して十名所は小規模で、中央線や身延線沿線にはあっても、必ずしも鉄道からは見えないものもあった。これらの選定は、山梨の鉄道利便性向上をきっかけに、観光開発を背景としたものと考えられる。特に景物に偏っており、山と川、歴史的な寺社が多い。下部温泉は選からまれ、鎌田川の蛍（ゲンジ）がふるさとの景物として選ばれている。

甲山峡水は、明治39年（1906）一府九県連合共進会が山梨県で開催されたときの絵画である。明治政府の殖産興業政策の一貫で、もともと明治36年（1903）中央線の開通記念事業として企画され、日清戦争で延期されていたものであった。当時の山梨県知事武田千代三郎が東京から大塚蒼湖・鈴木尚重を招いて名勝十八カ所を描いてもらった。県内の名勝は、河口湖、精進湖、富士川屏風岩、猿橋、天目山途上土屋惣蔵防戦の図、恵林寺、甲府城、信玄の墓、御獄新道覚円峯、金桜神社、瑞牆山、本谷川千噸石、増富村矢竹岩、菅原村白須松林、実相寺神代桜、駒城村精進瀑、浅間神社御幸祭である。これも山梨県でのイベントをきっかけに景勝地の宣伝効果を狙って選定されていることがわかる（山梨県1984）。

塩山八景十名所は、昭和59年（1984）市政30周年記念に地元公募で選定した。八景は大菩薩峠、恵林寺の晩鐘、塩の山と湯煙、東山フルーツラインの夜景、三窪高原のお花畑、一ノ瀬高原と溪谷、柳沢峠の富士、塩山桃源郷である。十名所は放光寺、向嶽寺、雲峰寺、熊野神社、菅田天神社、慈雲寺、甘草屋敷、於曾屋敷、嵯峨塩溪谷、ころ柿の里である。農道や桃源郷など現代の産業の風物も織り込まれている。選定の内容は意外に保守的で、伝統風景が中心である。橋や高架道路などの新しい風景はわずかでしかない。また甘草屋敷に見られるような伝統的な郷土の突き上げ屋根の建築様式も選ばれている（塩山市2002）。

山梨市八景は昭和60年（1985）市政30周年記念に選定され、笛吹川と万力林、差出の磯とチドリ、石森山のツツジと果実郷、帯那山の雲海、兜山の四季、大石山の奇石群、仏沢の暮雪、重川の夕映えである。伝統的な風景であり、暮雪など八景式をみ、また2つの要素の組合せにも特色がある（山梨市1985）。

大月市富岳十二景は、平成2年（1990）地域活性化の基礎資料として調査委員会を設け、景観資源及び鉱泉資源についての学術調査のまとめである。場所は、雁ガ腹摺山・姥子川、牛奥の雁ガ腹摺山、大蔵高丸・ハマイバ丸、滝子山、笹子雁ガ腹摺山、扇山、百蔵山、岩殿山、高畑山、九鬼山、高川山、本社ガ丸である。大月市の資源は、山頂から展望できる富士山の景観で、富士山との距離が最適、独立峯からの山並みを通した富士山の展望は、最も美しいシルエットとしており、観光資源開発を目的とした（大月市1990）。

3. まとめ

- 1) イメージ性：視点や対象を限定せずに空間や場所を表す景と、明確な構図として理解する景がある。
- 2) 大衆性：住民の投票など、市民参加、市民協働での作業の結果選ばれる。
- 3) 時代性：時代に即して歴史性を評価しており、積み重ねによる重畳性が見られる。
- 4) 時間性：夕照、雲海など時刻や季節の特定の時間の風景が選定されている。
- 5) 八景様式の混在：瀟々八景のモデル的な様式、暮雪、晩鐘、夕照などが緩やかに含まれている。
- 6) 伝統性：伝統的な風景や寺院・神社などが選択されている。
- 7) 創造性：流螢など新しい八景の様式を考案して命名している創造性が見られる。

参考文献

- 塩山市（2002）、市民生活ガイド、塩山市役所企画財政課
- 大月市地域資源調査会代表田中収（1990）、大月市の地域資源、大月市
- 鈴木棠三（1983）、日本名所風俗図会5 東山・東海の巻
- 山梨県（1984）、ふるさとの名所、山梨日日新聞社
- 山梨市市誌編纂委員会（1985）、山梨市誌行政編、山梨市
- 山梨日日新聞（1931）、果然車窓十景十名所を決定
- 山梨日日新聞社編（1972）、山梨百科事典、山梨日日新聞社